

地の果まで
空の彼方へ



古屋信子全集
2



吉屋信子全集 2

地の果まで 空の彼方へ

定価 二五〇〇円

昭和五十年六月十五日発行

著者 吉屋信子

装幀者 中島かほる

発行者 朝日新聞社 角田秀雄

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 清美堂製本株式会社

発行所 朝日新聞社 東京・大阪・名古屋・北九州

第二卷 目次

地の果まで

3

空の彼方へ

211

短篇

367

あとがき

491

地の果まで

——父上の御霊にささぐ——

大正九年一月一日——六月三日「大阪朝日新聞」

一

早春の小雨が佳しく降りそそぐ日の灯^{ともし}頃であつた。

東京市外の巢鴨のほとり——電車を大塚の終点で降りて王子電車の方へ進む路の角を奥へと行く貸^か家^や建^{たて}のならぶ前通りを、黒い男持の洋傘をさして朽葉色の袴^{はかま}の裾^{すそ}を濡らして歩いて行く二十ばかりの齡に見える女学生がいる。

通りからすぐに格子戸のある、中古の平屋の前に止つて、彼女は今その大きな男持の洋傘をつぼめながら、

「麟ちゃん、私よ」

と低い綺麗な声で呼ぶ。

けれども、家の中からなんの答もない、彼女はそれなり格子戸を開けて入口の土間へ入ってしまった。

格子戸を開ける時、鈴^{べん}が鳴ったので家の中で気が付いたのか、奥から人^{ひと}の出る気配がした。

真中に細長く硝子を入れた障子をがたりと開けて、薄暗い入口を覗いて出たのは、紺^{くろ}飛^と白^{しろ}の対^{たい}の緋^ひ入^{いれ}を着て、その袖がまだ筒のまま可愛らしいように見える姿の青年で——十七、八かと思われる、色の白い眼の大きく澄んでい

「あつ、姉さんか、なんだ」

と青年はちよつとませた舌打ちをした。

「厭な麟ちゃん、お客様かと思つたの、ふゝゝゝ」

と、姉は入口で笑つた。

「もう試験はすんだの？」

と、青年は立つて上から訊く。

「え、今日ちよつと、朝一時間だけ、もう太平楽さ」

と答えながら、姉の方は来る途中で汚^{よご}したらしい白足袋を脱いでいる。

「姉さん相変らず歩き方が下手^{へた}だなあ」

と、青年は姉の様子を瞳^{まなこ}めながら言う。

「え、まったくよ、私女のくせに麟ちゃんよりもなんでも無器用ね」

と上りながら姉は言う。

姉弟^{姉妹}のならんで立つて、かく語り合う上り口の二畳の小部屋に、電気が引いてないので、外から流れ入る黄昏の暗が濃くなっている。左手の隅の小窓の下には、粗末な机に煤竹の三段の本棚が並べてあつて、机の上にはインキの壺や筆立が置かれてあつた、筆立には筆もペンも三角の定規まで差し込んである。本棚には雑誌も教科書らしい本も、それぞれ揃^{そろ}って立てられて上の棚には小さな額が据えてある。額の中には卵形の何か男の写真が入れてあるらしい。

「麟ちゃんもすんだんでしょ」

と、姉が部屋^{へや}の机の上に眼をつけて問う。

「あゝ、すんじまった」

と、軽く答えて青年は突あたりの煤けた障子の奥へ入って行った。

「麟ちゃん、働いているの」

と、姉はまたその後から入って行く。

そこは台所である。

小さな瓦斯七輪の上に、赭い色をした瀬戸物のお釜が載せられて、今白い息が吹き出している。

「大きい姉さんは？」

と、姉が問うと、流元で何かしていた青年は上を見上げて、

「そこで寝ているの」

と、片側の戸棚の脇の半間の開きの戸を示す。

「あゝ、そう」

と、姉はその開きを開けて入った。そこは四疊半の茶の間で、長火鉢や小さな茶棚や食卓がならんでいる。

その向う縁に向かって障子の前に、昔風の柄の紅入友禅の掻巻を掛けて横になっている丸髷のやや乱れた姿で、面長な愁い顔の寂しい人が開きから来る妹の方を見て微笑んだ。

二

「緑さん、今日は」

と掻巻の中の人が声をかけた。

「ただいま、姉さん、どう？」

と、緑は、枕元に坐る。

木枕をききと鳴らして、緑の方に向いた姉は寂しく笑って、

「なんでもないの、少しばっかり」

「いけないのねえ、お大事に、私の学校の方も、今日でいいの、お休み中の外泊届を出して来たから、ゆっくりお手伝いして行けるわ」

「ありがとうよ、麟ちゃんも今年はどう出てしまつてね」

と、姉は少し明るい面になって、緑を見上げた。

「えゝ、早いものですねえ。そらあの頃、国の師範が厭だと言つて東京へ逃げて来たのは、ついこの間だと思つていたのに、ほんとに早いは月日ね」

緑は姉の掻巻の袖口を、まさぐりながら言う。

「えゝ、ほんとにねえ、でも緑さん、これからよ、麟ちゃんのことで骨を折るのは」

と、姉は眉を心持ひそめて、独語のようにつぶやく。

「えゝ、まったくこれからね、麟ちゃんにも実際しつかりして貰わなくちゃあ」

「ほんとにね、けれども麟ちゃんは、あんなに気が弱くて生優しいから案じられるよ」

「心配なことはないわ、男は優しいからって、今の世になんで悪いことがあるものですか、それよりも今までのように男子が乱暴で婦人を虫蟻同然に思っているのを、誇りに

なんかされてはたまらないんですもの」

と、緑は姉の前を忘れたように、少し烈しい語気になった。

「また始つたよ。緑さんの議論が、——」

掻巻に埋まっている姉は軽く笑い出した。

「あら、ごめんなさいよ、姉さん笑つたりなんかして、ひどいわ。だつて私の方の寄宿舎でいつでも、こんな事言ひ合ふんですもの」

と、緑は気がついて少してれて笑いながら言う。

姉も掻巻の袖にかくれて笑う。

その時、開きの襖戸ふすまどから半身を出して、さっきの青年が、声をかけた。

「姉さん、御飯が出来たよ」

この声に振り向いて立ち上つた緑は、

「まあ、隣ちゃん大働きね、私も何かしてよ」

と、台所の方へ行こうとすると、姉が掻巻から細やかな手をのべて、

「緑さん、いったいどうしたの、あなたの袴はかまの裾がびつしよりよ、早く脱いで頂戴な」

緑はこう注意されて裾を見返して、仰山ぎやうさんに、

「あゝ困つた、困つた」

と大声をあげて、袴の紐を解きながら次の間へ入った。

緑が次の間で袴を脱いで畳たたみにしている間に、弟の麟一は食卓の上に、茶碗や箸や香かうの物の器などをならべた。

「緑姉さん、御飯」

と、麟一の呼ぶ声で、次の間から緑が出て来た。

袴をとって、着物をきちんと着なおして姉のものらしい古い地味な帯をしめていた。

「姉さん、これ貸して。押入から引っぱり出して来たの」

と、帯の前を手でたたいて緑は笑つた。

掻巻から出て、身づくろいをした姉の直子なほこは人妻らしいもの優しい中にどこかやつれた風情ふうせいで食卓の前に長火鉢を脇にして坐っていた。

三

外には、まだ冷たい小雨が、しょぼしょぼと降りそそいでいた。

この小さい家の茶の間の一つの食卓を囲んで、三人の姉弟が食事を始めた。

電燈の灯のもともとの明るい食卓の上には小鍋が置かれて湯気を吐いている。

「隣ちゃんは、まったく女の生れ代りね、お料理の天才よ」

と、緑が言いながら鍋の中へ箸を入れた。

「だって、あたり前さ、上等のコックはみんな男だぜ」

と麟一は茶碗の御飯を口へ運びながら少し得意そうに答える。

「はい、ごもつとも様」

と緑は笑つて箸を動かした。

「麟ちゃんのお蔭で無器用な緑姉さん大助かりね」

と直子もまた笑つた。

「今晚、義兄さんは宿直？」

と緑が手を休めて訊いた。

「えゝ、そう宿直」

と直子は鉄瓶から急須へ湯をつぎながら答えた。

「ほんとに、義兄さんで好人ね」

と、緑はしみじみ感じたらしく言う。

「あら、おかしい、なぜ思い出したように今頃そんな事を言うの」

と、直子はいぶかしい面持をした。

「だって、今夜のように義兄さんがいないと、なおさら義兄さんの好人だという事が、はつきり感じられるのよ、なぜでしょう」

と、緑は生真面目な顔をした。

「緑姉さんはなんでも哲學家じみた理窟を言い出さなくちゃあいられないのだな」

と、麟一は姉の顔を見て笑つた。

「何も、そうじゃあないけれども、まったく義兄さんは好人ね」

「もちろん」

と勢いよく声をあげて麟一はまた茶碗へ箸を動かし始めた。

「ほんとに、義兄さんへは姉弟とも恩を返すつもりで、よく勉強しておくれよ」

と直子はおだやかな調子に力をこめて願うように言った。

仲の好い姉弟三人は、かく語り合いながら、また箸を動かしていた。外の雨はまだやまぬらしい。

「姉さん、こんな春雨の晩に、孤児の三人がかたまつて、晩御飯を食べるなんて、何か歌になりそうだね」

と、麟一は箸を置いて、早くも眼を潤ませた。

「えゝ、ほんとにね」

と、直子は火鉢の猫板に片手を突いて首をしめやかに、うなだれた。緑は灯のもとに光る緑なしの近眼鏡を仰向かせて打ち笑つた。

「歌もいけれど、そら麟一宗匠、何か一句お願いいたします」

と、緑はまた打ち笑つた。

「宗匠も料理番をしたから、いい秀逸が浮ばない」

と、麟一は、しょうことなしに優しく笑つた。

「弱虫宗匠、私が作つてやるよ、あのね、いいかえ、『春雨や鳥鍋つくく三人かな』っていうの、どう、秀逸——」

緑は大声で笑い出した、直子も麟一もまた笑いころげた。

「いやな俳句だなあ、いったい女らしくない着想だな」

麟一は呆れたように言った。

「そう、では麟一宗匠お手並を是非拝見、拝見、さあ、さあ」

と縁は芝居がかった口調で詰めよった。

麟一はちょっと澄んだ眼で向うの壁の灯影を見つめていたが、やがて唇を開いた。

「僕のはねえ、こうなの『春寒し親なし雛の餌をあさる』」

――

四

「うまい、天才！」

縁が箸で茶碗の縁をたたいて鳴らした。

「ほんとに麟ちゃん綺麗に上手だねえ」

と、直子も感心したらしく、うなずいた。

「だって、俳句なんて言葉の遊戲に過ぎないんだもの、ピイ……だ」

と駄々子の負け惜しみらしく下唇を突き出して、こんな事を縁は言った。

「縁さんのだって下手ではないがね、そらよく、あんだの言う個性がみな發揮されているんだもの」

と、直子が慰めるように言った、すると縁も麟一も笑いこらげた。

「個性の發揮は、ほんとに振っているわ」

縁は眼に涙さえ浮べて笑い続けた。

雨のそばふる早春の夜を、こうして三人の若い姉弟は食

卓の前に笑い興じるのだった。

この姉弟三人は、そのたがいの語る中に示すように孤児であつた。

亡父は春藤茂夫という外務省に雇われていた通訳だつた。

後年園川領事に伴われて、イタリーに行つて、彼地で病を得て空しくなつた。

亡母は、イタリーに単身で良人が行つてから、三人の幼い子供を連れて、一時、宇都宮の妹の嫁いだ先の浜野隆吉という菓子屋を営んでいる家に世話になつて暮らしていた。

この亡母は、お俊という名で、美しかった。

若い頃は、長崎で歌妓の境涯にいた。その頃青年時代の漂泊の生活をしていた茂夫が長崎に行つていた。そこでこの二人は相識するようになって結婚して、三人の子を挙げた。

とにかくこの夫婦は苦勞をして通つて来た。そして茂夫が園川領事の信任を得て、イタリーに行つてから、前途の光明を認めて、さらに努力して書記生にまで登ろうと、励んでいるうち、異国で儂くなったのである。

良人の死後、お俊は浜野家に三人の遺児を託して、自分は上京して園川領事の留守宅へ残してある大きい令息令嬢達のお付きの者として奉公していた。

そして宇都宮の浜野の方へは三人の子供達の養育料として、月々若干の金員を送つていた。

二、三年は事なく過ぎたが、三年目の秋からお俊は神経衰弱の気味に見えたが、そして保養のためと言って浜野の家に来た頃は、もう肺がずっと悪くなっていた。

妹のお秀や直子達姉弟の手厚い看護の甲斐もなく、絶えぬ気苦労を弱い身に負うて、晩秋の空に、野の煙のように消えて逝った。

後に残された姉弟は、そのまま浜野の家に引き取られて養われることになったので、長女の直子は小学校を出てから、二十の春まで浜野の家で裁縫をしたり台所を手伝ったりしていたが、浜野の主人の末の異母弟の浩二に思われ、妻に乞われて恋女房となった。

浩二は隆吉の異母弟だった。

浜野の家でも早く父親は亡くなって、主人には継母に当るお滋がいるばかり、店から奥まで権力はみな主人の隆吉が握っていた。

女性らしい優しい気質の浩二が異母兄の隆吉の氣に入らなかった。浩二は母と共に隆吉を恐れて、小さくなって浜野の家に暮らしていた。

浩二は市立の乙種の商業学校を卒業したまま、家に居て店の手伝いをさせられていた。

何かと言つては、よく異母兄の隆吉に叱り飛ばされても口応え一つせず、おとなしくしていた。

この浩二の弱い胸の中に、いつとしはなく可憐な孤児の直子の面影が織り込まれた。

五

浩二と直子――。

二人の恋がいじらしく募つて行く時、一番恐しかったのは隆吉の眼であった。

嫂と母親の情けで、ともかく二人の結婚の話が隆吉の前に持ち出された時、隆吉は二人を思いきり罵った。

このような卑しい野合の群れを浜野の家内で起したのは世間へ恥だと言つて怒った。

継母のお滋がみな罪を老いた肩に負うて詫び入った。そしてともかく曲りなりにも浩二と直子は結婚した、お滋は安心して死んだ。浩二等若い夫婦は異母兄の冷い眼の下に睨まれて、同じ屋根のもとに暮すに忍びかねて別居することを願った。

別居といえは当然分家するのであるから、相当の資本を分けて貰つて何か小さく商売を始めたいと隆吉に乞うてみたが聴き入れられなかった。

嫂のお秀の手段で、若干の金目なものを与えてくれただけ、隆吉からは何一つ分家する形の上からも譲り受けるものはなかった。

もう諦めてしまった浩二は、その問題は捨てて、ただ一日も早く恋女房の直子と共に冷い恐ろしい異母兄の家を出たいとのみ願うようになった。

その折、直子が叔母のお秀と相談して亡父茂夫の通訳時

代に親交のあった、志賀^{しが}壮介^{すけ}が官途を辞してからこれも同じように官務を離れた元領事の園川^{そのがわ}良文氏^{りやうぶん}が老後を送っていられる東京の邸内に、妻を失ってからの鰥夫^{くわふ}暮しをそのまま、老書生のように寄食しているのを頼って、事情を打ち明けて長い手紙を出した。

その結果、志賀の親切な尽力で、浩二は園川氏の関係しでいられる工業会社の下級ながらも社員として雇われる事になって、ささやかながら生活の保証が出来て、新婚の若夫婦は怪しい首途をして都に上り巣鴨に住居したのである。

今三人の姉弟が外の雨の音を聞いて坐っている小さい家がそれである。

「私こんなに笑いころがって御飯なんか食べた事はないの」

と、緑は嬉しそうに言った。

「そりゃあ、緑さんの学校の寄宿舎なんて理窟屋さんばかりのお揃いなんだもの、かた苦しいだろうねえ」

と、直子が答えた。

緑は眼鏡の下で眼を見張って、いいえ、という風に首を振って、

「そうじゃあないの、舎監の関根先生ったら始末に行かない、おかたまりなの、食堂のね、机の上に安っぽい鈴^{ベル}があって、それを先生がチンと鳴らすと食前の祈禱をするの、そしてどんなに早く食べ終っても、ちゃんと一人残らずお

しまいになるまで待っているのよ、そしてまたチンでおじぎをしてね——」

ここまで話しかけて緑は笑い出した。

「なんのことはない、まるで仔犬^{こいぬ}に芸を仕込むようだね」と、直子も笑った。

麟一は、未だ見知らぬ、うら若い女性の集うている寄宿舎のありさまを憧憬^{けいけい}れて想像するのであるう、青年期に入つた若々しい瞳をあげて姉の緑を見た。

「姉さん、みんなそんな事を厭^{いと}がっているの」と、訊ねた。

「え、種々だわ、真面目な顔して平凡に規則を守る人もあるし、異端者も居るし、何も知らんで騒いでいる、うすつべらなお転婆も居るし、机にかじりついて中等教員の免

状に生命^{いのち}を捧げる可哀そうな人も居るし、——」

と、緑は言い続けた。

「では姉さんはいったいなんの部類なの？」

麟一の不意打の間に、ちょっとまごついた緑はまた笑い出した。

「これはちょっと困ったわ」

緑も直子も麟一も、いっしょに笑い出した。

六

翌朝^{あした}は昨夜の雨が、すっかり晴れていた。

試験後の安らかな気持で緑は床の中に眠っていた。

今、台所の戸を開ける物音に、ようやく眼覚めた。枕をならべて寝ている姉の方を見返ると、まだ姉は眠っているらしかった。

緑は起きて、そのまま台所へ出た。

「麟ちゃん、早いね」

と、声をかけたが台所には麟一の姿は見えなくて、井戸端で水の音がした。

入口の戸を開け放ったところから緑が覗いて見ると、井戸端の流板の上に、麟一は猿股一つで、立って濡れたタオルで身体をこすっていた。

空へさしかかる春の陽の下に、若い青年の肉体が水々しい樹木の幹の肌のように見えた。

優しい型でも、どこか男らしく腕や足の筋肉の盛り上っているのなどを、緑は黙って見ていた。

「姉さん、お早う」

麟一が此方に向けて声を掛けた時、緑は気がついて、なんとということなしに赧くなって戸口の蔭へかくれた。

髪を手早く結い上げてから、緑は姉の白い前垂をしめて、台所へ出て来て朝の食事の支度を何かとしながら、茶の間や玄関の間の掃除を始めた。

その間に麟一は竹箒で台所の入口や玄関の土間や通りの方まで掃いていた。

昨夜は麟一の手で食事が用意されたのだから、今度は私がすると言って緑は朝の食卓を調えた。

「麟一さん御飯よ、姉さんの腕前をもらん」

と、茶の間から緑が大きな声で麟一を呼んだ。

直子は今朝も気分が勝れないと言って櫛巻にして気だるそうに長火鉢の向うに坐っていた。

「姉さん、大変な報知が舞い込んだよ」

と、麟一が一枚の葉書を手にして入って来た。

「何、何？」

と、緑がせき込んで訊くと、麟一はその葉書を直子の手に渡しながら、緑の方を見て、

「姉さん、おたがいに警戒しなくちゃあならないぜ」と言う。

「いったいどうしたのよ」

と、緑が眼を見張って、じれったそうに訊ねると、直子が葉書を読み終った。

「あれなの、浜野の叔父さんがこの春には東京へ来るんだって」

と言った。

「あゝ、そう、まあ、へーえ」

緑はちょっと気を抜かれたような顔でこんなことを返事して黙ってしまった。

「僕、厭だなあ」

麟一は悄気てしまった。

「麟ちゃん、何を心配するの、平気でいればいいわ」と、緑は慰めて力づけるように言う。

「麟ちゃんの恐ろしがるのも無理はないね、またなんだつと、あんな事になったのだから」

と、直子も愁い顔になってしまった。

緑ひとり叱る口調で、

「ほんとに厭な姉さんね、姉さんまで、そんな事を今更言つたつて仕方がないじゃありませんか、麟ちゃんをあのまま叔父さんの言うなりに田舎の師範学校にやつておいて行末どうなるんでしょう。卒業したつて知れきつてゐるわ、田舎の小学校の先生よ、それでお父様の跡がとれて、お父さんは末があんなで終つたし、男の子といつたら麟ちゃん一人よ、その麟ちゃんが師範なんかで埋もれて、たまるものですかね、麟ちゃん」

七

緑が熱した瞳で麟一の顔を睽めた時、麟一はなぜか眼を伏せた。

「麟ちゃん、麟ちゃんてば、さ、駄目よ、今からこのくらいのことで気の弱い顔をして腰を折つては、姉さんも姉さんよ、なんだつて今頃過ぎ去つた事をくよくよ言い出したんでしよう、ほんとうに厭ね、いくら私ひとりでやっきとなつて騒いでも、仕方がないわ、しっかりして頂戴よ、ね、ね」

と緑は少しいらだつて言つた。

「え、そりゃあ、緑さんのように一口に言つてしまえ

ば、そうだけれど、麟ちゃんだつて、これから上の学校に上るにしても、五年や六年またね、学費を出さなくちゃならないし、義兄さんがもう少しなんだと善いだけれども、やっぱり土地の市立の商業学校なんかではね、どうにもならず。やつぱり今までのように、叔母さんのお世話で中学校の時のように、かつかつさせて貰うよりほかに仕方がないんだもの、それにしても、叔父さんに先ず願つてみなければいけないし」

と、直子は静かに説き聞かすように言つた。

緑はその言葉の下から跳ね返すように答えた。

「え、大丈夫よ姉さん、いくら叔父さんだつて鬼でもなし、此方が訳をよく話してお願ひすれば相当の事はして下さると思うの。それにね麟ちゃんを帝大にやるとしても、高等学校三年ね、その間だけ叔父さんから少し補助して貰えれば、それから後は私がもう学校を出るんですけど、大丈夫よ、私ね学校さえ出たらどの女学校へでもすぐに奉職して、麟ちゃん一人ぐらいの世話は引き受けてよ。少し辛くても本科の方をやってゆきますわ、成績が半分以上の位置にあれば、文部省の無試験の検定が取れるんですもの、もう少しよ、三年ぐらいなんでもないわ」

こう言いかけて、緑の眼もとには、おのずと熱い涙が湧いて来るのだった。

麟一は宇都宮の浜野の叔父の家で小学校を卒業させて貰つてから、店で使われる事になったのを、当人が商売は嫌

いだ、學問で立つて行きたいと言う志望を叔母にまで打ち明けるし、また姉の緑は尋常六年を出ると、叔父叔母に黙って市のミッションの女学校に入学願書を出してしまつた。子供の頃から姉の直子にも勝り弟の麟一より強い性質の緑は自分の望む路のために、恐れずどんどんしてしまふのだった。

女学校へ通う事になって、入学許可の通知が浜野へ来てから、家中の者は吃驚した。すると緑は七つ八つの頃から毎日曜に行つては綺麗なカードを貰つて来て、クリスマスには歌まで独唱させられたりした、教会の日曜学校で可愛がられた女宣教師の米国婦人のミス・マシューに頼んで、わざわざ浜野の家へまで来て貰つた。このミス・マシューの巧みな日本語をあやつりながらの女子教育論の説教は、とうとう浜野の主人の隆吉を説きふせてしまった。

そのお蔭で緑は女学校に入れて貰うことが出来た。

その緑が麟一を小学校だけでやめさせて菓子屋の見習小僧にするなどが大不平であつた。

その時も女学校の二年生になっていた緑は、叔母にも願うし叔父にも頼んだ。それで、将来すぐに独立の出来るようにというので、師範学校へなら入れるという話にまでなつた。

八

師範学校——小僧になるよりは学校生活に入るがいいと

いうので、麟一は試験を受けて入つた。そして二年目にどうしても、師範は厭だ、中学に行きたいと言って、東京の姉の直子の新家庭へ逃げ込んで来た。

浩二夫婦の者も驚きもし、困つたが、それでも一人の弟のことだからと直子の心労を思いやつた浩二が異母兄に掛け合つて、多少争つた上で、叔母の助言で、このまま東京の中学校へ通わせてやることになったが、隆吉はそれ以来浩二夫婦とも麟一とも心よからぬ間柄となつたので、そして緑が昨年の春ミス・マシューの厚い好意からミッションの補助を受けて麹町の英學塾へ入つたので、またまた上京し、弟同様に浩二の家に世話になるようになった。

それで浩二夫婦と緑と麟一、いずれも困結して東京に居るようになって、ますます宇都宮の浜野家とは日毎に遠ざかつて行く感じがするのだった。

それで、今朝の隆吉が近く上京するという葉書が来たので、はからずも、姉弟の心配の種子を蒔いたのである。

「緑姉さん、僕だって一生懸命にやるつもりさ」

と、濃い眉を張つて、麟一は優しい調子の声に、ことさらに力をこめるようにして突然かたくなつて言い出した。

さつきから自分で言つた自分の言葉に感激して涙さしぐまれる気持にさえなつてしまった緑は、今弟の声を聞いて、たまらなくなつて泣き出した。

「きつとよ、麟ちゃん、麟ちゃん、ね、一高の試験を受けて入つて順々に大学を出てやつて頂戴、ね。高等文官試験